

真田家霊屋

真田家は、江戸時代（1603年～1867年）の多くの期間、松代を支配した一族でした。松代での真田家による支配は、真田信之（1566年～年 1658）が、徳川幕府によって松代に移された 1622年に始まりました。そしてその同じ年、禅と仏教の寺院である長国寺が、新しい真田家の寺院として松代に建てられたのです。この霊廟のうちの 3 つは、現在でも残っています。

長国寺の本堂の後ろには、信之の霊屋があります。この霊屋は 1660 年に建てられ、外観は黒塗りで金箔と、複雑な木彫りで飾られています。また霊屋の中にはより精巧で鮮やか彫刻があり、天井には一連の金箔による絵が描かれています。この信之の霊屋は国の重要文化財に指定されています。

信之の霊屋の右には、4 代目藩主である信弘（1671 年～1737 年）のために建てられた別の霊屋があります。1736 年に建てられ、龍の絵が描かれた天井で知られています。長国寺の本堂と信之の霊屋の間には開山堂があります。この開山堂は、1727 年に三代目藩主である幸道（1657 年～727 年）の霊屋として建てられました。二代目藩主である信政（1597 年～1658 年）の霊屋は信之の霊屋の左にありましたが、現在は林正寺の中にあります。真田幸道の母のために建てられた 5 番目の霊屋はかつて長国寺の後ろにありました。

また真田家の墓地も長国寺の中にあり、10 代にわたる真田一族の墓と記念の石があります。また、西楽寺や大英寺など他のお寺にも真田家の霊屋があります。